

日本人の神様の正体 永井正範

本稿は「倭語『神奈備』の意味を探る」の表題で2013年に発表した論考である。これを、今回上の表題に改め、手を加えた。(2016.7.1)

[1]《日本人の神》

「神奈備」の語に近づくために、先ず、《神》について考える。

世界中の民族が、《神》の概念を持っている。

では、《日本人の神》とは、どのような存在を言うのだろうか？

『記紀』には、「天照大神」を最高神とする《神の体系》が語られている。しかし、これらの《神》は、日本人の習俗からすれば、余り身近な存在ではない。

私たちが《神》を最も身近に思うのは、行き詰った時であろう。

そんなとき、「天照大神」を思い浮かべる人はまずいないだろう。

源平の時代、武士は、「南無八幡大菩薩」と念じたという。

やはり、「天照大神」ではなかった。

しかし、この「八幡神」も、どのような神なのかはよく分からない。武士たちにも分かっていなかったのではなからうか。

結局の処、日本人がいざという時、頭に浮かぶのは、「天照大神」とか、「八幡大神」とか、《特定の神格をもって創られた神》ではなく、超越した存在である《神さま・仏さま》であり、「どっちでもいいから助けて頂戴」ではなからうか。

私たちはどこの神社や、寺にでも「初詣」する。神社の「とんど」の火祭りでも、寺の「護摩供養」の火祭りにでも出かけて、《神さま、仏さま》におねだりする。「今年が良い年でありますよう」、「入学試験に受かりますよう」、「良い人が見つかりますように」。

《日本の神さま》は、私たちが生きていく上で守るべき《規範》など示さない。神社は、うちの神さまは何に効能があるかを言い立てるだけ。私たちも、自分が守るべき《モラル》なんかそっちのけで、困った時、願い事のある時は、《神さま・仏さま》に《おねだり》する。

現代人は月給を生活の糧にっていて、これは、雇い主との間の《ギブ・アンド・テイク》だから、一年間給料もらったからといって、秋祭りや初詣で雇い主に《感謝》を捧げたりなんかしない。

しかし、農業が中心であった時代には、毎年、《実り》を齎してくれた《神》に《感謝》を捧げていた。

これが《収穫祭》であり、《正月を迎える祭り》であった。つい最近まで、祖父あるいは曾祖父の代まではそうだった。

では古代は、採集経済の縄文時代、農業生産の弥生時代はどうだったろうか。《生活の糧》の全てを自然に委ね、自然の脅威にさらされることの大きかった時代、人知の及ばないものに対する《畏敬の念》、そして《実り》を齎してくれたことへの《安堵と感謝の念》は、現代とは比べようもない程に大きかったのではなからうか。

その縄文、弥生の時代の《神》とは何だったろう？

[2]《神さまの正体》

ここで結論を先に言ってしまう。

縄文、弥生時代の《神》とは《蛇》である。と言え、**「何言ってるんだか」**と笑われるかもしれない。

しかし、次の不思議の色々を考えて頂きたい。

縄文時代には、縄文土器や土偶に、《蛇》がリアルに刻されている。

森の中で生きるための糧を採集し、動物を狩りする時、人の《最大の脅威》はあの気色の悪い《蛇》、それも恐ろしい毒を持った《蝮》であつたろう。

人を一撃で倒す《強さ》と《怖さ》の故に、多くの民族が《毒蛇》を《神》と崇めている。

しかし、弥生土器に《蛇》は無い。

弥生時代になると、もはや《蛇》は、《脅威》でも《畏敬》の対象でもなくなったのかというと、そうではない。

弥生時代、生きるための糧を得る場は森から水田に移る。

そして居住空間に造られた高床倉庫には《ねずみ返し》が備えられた。

経済の中心が農業生産に移り、余剰を蓄えることが可能になると、人にとって自然界最大の敵は《野ネズミ》になる。

そのネズミの天敵は《蛇》である。敵の敵は味方、中でも《青大将》は、人を襲うことも無く、《人の最大の味方》となる。

と同時に、《蛇》はその姿態から《男根》に重ねられ、《豊穰を齎す種神》として位置づけられ、《決して殺してはならない存在》となり、縄文時代以上に、《神》としての地位を固めていったのである。

しかし、《蛇》の姿態そのものは、人にとって余りに異質、決して相容れることの出来ない、忌むべきものであつたろう。

そこは現代も古代も、人の心情において変わりなかったと思われる。

このため、日本人においては、《蛇の姿態そのもの》の《直截的な表現》は慎まれ、《蛇を象徴するもの》に置き換えられていく。

そうして、奈良時代になると、《神様の正体》が《蛇》であること自体が忘れられてしまうのである。しかし、《神さまを象徴する物》は残され、現代まで引き継がれた。

その《神さまの象徴》から、私たちは《神さまの正体》が《蛇》であることを知るのである。

その《神さまを象徴する物》を三つだけ挙げよう。

[3]《注連縄》(しめなわ)

一つは、日本全国、どこの神社にもある《注連縄》(しめなわ)である。

《注連縄》は神域を画して張り巡らされる。

何故だろう？

実は《注連縄》は、《蛇の交尾》を現わしているのである。

雌雄が縄のように絡み合う《蛇の交尾》はなんとも不気味であり、神秘的と言う他ない。

猛毒のハブは 24 時間以上も絡み合うという。
もちろん都会に住む現代人に見ることは出来ないが、自然の中で暮らしていた古代の人はこれを目にし、これが生殖行為であると理解し、強烈な印象を与えられたに違いない。

そこで、この《蛇の交尾の象徴》である《注連縄》を張り巡らせ、人が妄りに近寄るべきではない神域を画したのだと思われる。
撚り合わせた《縄》はそれ自体が《蛇の象徴》であり、《注連縄》である。
二本の石柱からなる《メ鳥居(しめとりい)》には、《紙垂(しで)》を垂らしたただの縄が張り渡される。

縄は、更に編んで多様な形の《注連縄》が作られる。
出雲大社や恐らくこれを模したと思われる宮地嶽神社の《注連縄》は、美術的な造形となっている。
しかし、神社の中には今もなお、如何にも《蛇そのもの》を連想させるように組み上げている処も多い。

中国に《注連縄》は無いが、原初神の伏羲と女媧は、腰から上は人、下は蛇身で、その蛇身を絡ませている。これも蛇の交尾を象徴している。
「示」(シ)の漢字は、祭壇である「丁」に置かれた新鮮な犠牲「-」から血が滴っている「ハ」という象形であり、(神霊の拠る所)、(神)、(神の意思)、(神の意思を示す)と転じ、(示す)意になっている。
その「示」(シ)偏に「巳」(シ)を旁とする漢字「祀」(シ)は、(神を祀る)という意味である。
(血の滴る生贄を供えた祭壇)である「示」と、(蛇)を意味する漢字「巳」が並んで、(神を祀る)意になるということは、「巳」が「神」として祭壇を設けられ、生贄が供えられていることになる。

《中国における原初の神》もまた、《蛇》であったのである。

[4]《鏡餅》

二つ目は、《鏡餅》である。
正月、日本人は、秋の実りで《鏡餅》を作る。
この《鏡餅》は、家の中で最も神聖な場所、「床の間」に飾られ、その年の実りに感謝し、新しい年もまた実り豊かな年であることを祈る。
《鏡-餅》の「餅」は素材を表すから、実体は「かがみ(鏡)」であろう。

私たちも、美称の「お」を付けて《お-かがみ》と言う。
では、《お-かがみ》の《かがみ》とは何であろうか？
《かがみ》の言葉には「鏡」の漢字が当てられる。
しかし、漢字の「鏡(きょう)」の訓の(かがみ)は、「影見(かげみ)」から出来たと思われる倭語であって、餅の《お-かがみ》とは関係がなさそうである。
すなわち、餅の《お-かがみ》に当てられる「鏡」の漢字はただの《当て字》に過ぎないのである。

本来の「倭語」の意味を考えると、その倭語に当てられた漢字の意味に捉われてはならないが、餅の《お-かがみ》の「鏡」も正にそうした例である。
ところが、《お-かがみ》の(かがみ)の語は、如何なる語素により成るかについて、言語学者の間では定説がない。

これを追求した研究者に民俗学者の吉野裕子さんがおられる。
吉野裕子さんは、《かがみ》の「かが」は、《蛇》の古語の「かか」であると見ておられる(『蛇・日本の蛇信仰』1979年、43頁~)。

「かか」の語は、蛇の一種の「山かか-し」、山田の中の一本足の「かか-し」の語に残されている。

「かか-し」の「し」は、《人》または《神》の意、これは私の解釈である。
《かが-み》の「み」は、吉野さんは「かか(蛇)」の「目(め)」、もしくは「身(み)」だとされる。
しかし私は、この「み」もまた、《蛇》の意味の《巳(み)い様》の「み」であると思う。

「み」は《蛇》を指す《最も古い倭語》であり、中国から中国の(蛇)の意味の漢字「巳」(呉音、漢音とも、シ)が日本に入ると、この《巳(み)い様》の「み」に漢字「巳」が当てられ、漢字「巳」の訓が「み」となったのである。
(蛇)を意味する倭語の「み」は、転じて《神霊》、《神そのもの》の意になる。
「大山津-見」(おおやまつ-み)、「綿津-見」(わたつ-み)の「み」である。
そして尊いものに被せる接頭語「御(み)」になる。

「かか」は重語であり、元々は「か」が《蛇》の意であったと考えられる。
倭語「かみ(神)」の語源は、同一の意味の一音節語を並べた重語「か(蛇)-み(蛇)」であり、「かが(蛇)-み(蛇)」もまた、「神」の意であるというのが、私の解釈である。

《お-かがみ》は、通常、大と小を二つ重ねる。
三つ重ねるところもある。何故重ねるのか？これは蛇が《とぐろ》を巻いた形を再現したのである、と言うのが、吉野裕子さんの説であり、私もそのように考える。

秋の実りで作られる餅の《お-かがみ》は、《蛇の象徴》であり、神に供えられるのではなく、《かがみ》自体が主人公の《神》として、神聖な床の間に祀られるのである。

そして、秋の実りに感謝した後、この《お-かがみ》を切り分けて家族一同で頂く。

琵琶湖の湖北には、村全体で巨大な《お-かがみ》を作り、これを村人一同で切り分けて頂くところもあるという(前掲『蛇』118頁)。

吉野さんは、これは《蛇》の脱皮にあやかり、再生の力を分け与えてもらい、新しい年に、《蛇》のように生まれ変わり、また労働に勤しむのだという。
しかし、《お-かがみ》を祀る《習俗》は伝えられたが、《かがみ》が《蛇のとぐろ》に由来することは忘れられたのである。

[5]《神奈備山》

そして三つ目、それが《神奈備山》である。

(一)「神奈備」の語は、『万葉』の時代になると、「神奈備-山」、「神名火-の淵」、「神奈備-の石瀬の杜」、「神奈備-川」と、《神域》であるかのように使われる。

しかし、《神奈備-山》を《ご神体》とする神社はあるが、《淵》や、《杜》・《川》を《ご神体》とする神社は無い。これは何故だろう？

《神奈備山》の代表格とされる奈良盆地の『三輪山』(みわ山)467mを見よう。
『書紀』には、『三輪山』に住む《蛇》の神話が記され、伝承では『三輪山』は『大神(おお-みわ)神社』の《神体山》である。
つまり、《山そのもの》が《ご神体》なのである。

だから、『大神神社』には拝殿と鳥居しかなく、神を安置する本殿がない。
そして《ご神体》である『三輪山』は、《円錐形のなだらかな山容》を示している。

《神奈備山》と言われ、ご神体とされる山は、全て円錐形であり、ピラミッド型であり、富士山型の山ばかりである。
この《山の形》が何を示しているかが問題なのである。

これも、吉野裕子さんが指摘されている。
《お-かがみ》と同じ、《蛇のとぐろ》なのである。
『万葉』以前の時代にあつては、「神奈備」の語は、《蛇のとぐろ》と見立てられた《円錐形の山》に対してだけ用いられたのである。
《かがみ山》(鏡山)と言われる山が各地にある。
私は十幾つ把握しているが、きれいな円錐形の山ばかりである。
《鏡餅》の《かがみ》同様、《かがみ-山》も、《蛇のとぐろ》と見立てられた山なのであり、神に準えられたのである。

(二) では、『三輪山』の言葉の『三輪』(みわ)の意味を考えよう。
「み」は、《巳(み)い様》の「み」で、「わ」は《輪っか》の「わ」、つまり、「みわ」の言葉自体が、《蛇のとぐろ》を示していたのである。これが私の解釈である。

「みわ」が《蛇のとぐろ》を意味したことは『記紀』の時代にはもう忘れられてしまう。
しかし、「みわ」の語が《神聖なもの》、《神そのもの》を意味するという記憶だけは失われなかった。
だからこの「みわ」に、ずばり、「神」の漢字を当て、『大神神社』と書き、「大-みわ-神社」と読んだのである。

(三) では、倭語「神奈備(かむなび、かななび)」の意味を考えよう。
『万葉』の時代、「神奈備」の語が、山、淵、杜、川など、神域を言うように用いられたことから、「神奈備」を、《神が「なばる」(隠れる、お隠れになる)神域》と捉える研究者は多い。
しかし、「なばる」の動詞は「なび」に変化しない。

奈良県斑鳩町に標高 82m のかわいらしい《神奈備山》、『三室山』(みむろ山)がある。龍田川の畔のこの『三室山』は平安時代からつとに有名である。
私は JR「法隆寺」駅前にしばらく居たから、よくこの『三室山』まで歩いた。
和歌に出てくる龍田川は紅葉で有名だが、今は、桜が見事である。『三室山』も全山桜である。

この『三室山』の場合、「神奈備山」ではなく、「神南山」と書かれてきた。
これを学者の皆さんは、「かななび山」と読む。
しかし、「南」の語は、「みなび」とは読まない。私は、この「神南」の語は(かみ-みなみ)山、すなわち、(かむ-なみ)山と読まれたと考えている。

全国的に見ても、「神南山」と伝承され、(かむ-なみ山)と発音されて来た山がある。

これらの全てが「神奈備山」(かむ-なび山)同様、《円錐形の山》、《三角形の山》である。

古代の人は、こうした《円錐形の山》、《三角形の山》を見て、鏡餅の《かがみ》と同じように、《蛇のとぐろ》を連想し、《神のみ姿のような山》、すなわち、《神なみ(並み)-の山》と考えたのである。

ここで言う「なみ」は、現代語でも使う(人並み)、(犬猫並み)の(並み)であり、《神-と同等の-山》を意味したと考えられる。

「並み」の語は古く、「並む(namu)」と「並ぶ(nabu)」の古語の動詞がある。

『書紀』に「盾(たた)なめて(na-me-te)」(盾を並べて)、『古事記』に「日日(かが)なべて(並べて、na-be-te)」(日にちを重ねて)、の使用例がある。

すなわち、「神南山」は、「神-並み(na-mi)山」、「神奈備山」は、「神-並び(na-bi)山」であり、この「並み」と「並び」もまた、私の言う《m音とb音の交代した同じ意味の言葉》だったのである。

これまで研究者は、「神南」の語も「かんなび」と読んでしまった。

だから、現代語に残った「なみ」(並み)の語に思い至らず、従ってまた古語の「並び」にも連想が及ばなかったのであろう。

(四) では、奈良龍田川畔の神南山・『三室山』の《倭語》「みむろ」についても分析しておこう。

私は、「み」は、《巳(み)い様》の「み」で、「むろ」は(室)、すなわち、《蛇の住み家》の意と考える。

つまり、この三角形の《蛇のとぐろ》と見立てられた《円錐形の山》は、「みむろ-山」、すなわち、《蛇の住み家の山》と名付けられたのである。

『諏訪神社』に、竪穴住居を作り、その中で藁の蛇を育てる神事がある。

これが《御室神事》(みむろ神事)と呼ばれている。

ここでは、《竪穴住居》、すなわち、《土室》が、ずばり、《巳さまの室、蛇の室、み-むろ、御室》なのである。

そしてこの「むろ」である《竪穴住居》の形もまた、《蛇のとぐろ》に見立てられたのである。

ここは吉野さんの指摘しておられる処である(『蛇』38頁)。

(五) 《円錐形や三角形のきれいな山》を《ご神体》とする神社は各地にある。

私がこの二年間で訪ねた《三角形の神体山》を持つ神社を挙げてみよう。

琵琶湖東岸の『三上山』(み-かみ山)432mは、新幹線、名神高速道路からも、琵琶湖西岸からも目立って見えるきれいな《円錐形の山》である。

この『三上山』は麓に鎮座する『御上神社』(み-かみ神社)の神体山である。

「み-かみ」の「み」は、《巳(み)い様》の「み」(蛇)で、「かみ」に「上」の漢字が当てられているが、本来は「神」で、「巳-神」の意であるというのが私の解釈である。

『三上山』の東北15kmに『阿賀神社』(あが神社、別名『太郎坊宮』)がある。見事な《三角形の切り立った岩山》である『赤神山』(あかがみ山)350mの中腹にあり、この『赤神山』を神体山としている。

神社に拠れば、「あ-が(阿賀)」は、「あか-がみ(赤神)」の意であるという。
『阿賀神社』の東北 15 km に『多賀大社』がある。
この南にある『青龍山』333m も、『多賀大社』から見るときれいな《三角山》であり、私は『多賀大社』の神体山であったと思っている。

京都府の『元伊勢皇太神社』の神体山『日室ヶ岳』(ひむろヶ岳)427m も秀麗な《ピラミッド型の岩山》である。

『日室ヶ岳』の「ひむろ」の「ひ」は、やはり《蛇》の意と考えられる。
「へみ」・「はめ」・「はぶ」・「はむし(爬虫)」の「は」・(天の羽々斬)の「はは」など、大陸から伝わったと見られる(蛇)の語はh音を持っている。
私は、この「ひ-むろ」は、「は(爬虫)」の住み家の「むろ(室)」の「は-むろ」から来ており、太陽の「日」字を当てて、「日室」になったのであろうと思っている。

なお、大陸のh音の語は日本に伝わった時、《日本人の発音特性》からk音と聞き取られ、k音の語として定着する例が見られる。

大陸の(蛇)の意の「はは」は、「かか」・「かが」ともなって日本語に定着したようである。

これが「かか-し」・「かが-み」の倭語であると考えられる。

岡山県玉野市の『玉比咩(たまひめ)神社』は、背後の《三角形の岩山》『臥龍山』190m を神体山としている。

瀬戸内海の愛媛県今治市「大三島」にある『大三島神社』(『大山祇神社』)は、背後の見事な《ピラミッド型の岩山》、『鷲ヶ頭』436m を神体山としている。

「大三島」の「み」は《巳様》の「み」で、「おお-みしま(大-巳島)」の意であらう。

徳島市の『眉山』(びざん)290m は、どの方角から見ても眉(まゆ)の形に見えるから、眉山(びざん)と言うとされている。

しかしこの山も《蛇のとぐろ》を連想させる《神奈備山》であるから、私は、「び(眉)山」は後の付会であって、《巳様の山》の「巳-山」(み-山、み-せん)のm音の「み、mi」がb音の「び、bi」に交代して、「眉-山」(び-山)になったと考えている。

この『眉山』の麓に『三島神社』がある。

愛媛県の『大三島神社』から勧請されたと言うから面白い。

この『眉-山』(=巳-山)もまた、『三島神社』(=巳島神社)の神体山だったのである。

広島県の『厳島神社』のある『宮島』は、《蛇のとぐろ》ではなく、全島が《うねうねと横に這う蛇》を連想させる山の峰の連なりからなる。

この標高 535m の山を『弥山』(み-せん)と言う。

《巳様の山》の「み-せん」(巳-山)の意であらう。

私は「宮島」の「宮」(み-や)の語源は、《巳(み)-屋(や)》であり、《蛇を祀る屋》から、《神の住い》、「神の宮」となり、《天皇の住まい》である「天皇の宮」の意に転じたと考えている。

福岡県福津市の『宮地嶽神社』は、《円錐形の山》『宮地嶽』175m の中腹にある。「宮(み-や)」は、《巳を祀る屋》、《神の社》であるから、神奈備山の『宮地嶽』の語自体が《神体山》を意味していると考えられる。

しかし、現在の宮地嶽神社は祭神を「神功皇后」としているから、『宮地嶽』を神奈備山とも、《神体山》とも言わない。

奈良の『鳥見山』(とみ山)245mは、『三輪山』に似た神奈備山である。しかし、麓にある『等弥神社』(とみ神社)は、「天照大神」を祭神としていて、『鳥見山』を神体山とも、神奈備山とも言わない。私としてはこの地で祭神「天照大神」では突拍子もないように思うが、恐らく、逆族・登美毘古との関連を断ち切りたくて、『記紀』の最高神を持ち込んでしまったのであろう。

ついでに触れるなら、『鳥見山』北麓にある桜井茶臼山古墳 207m と、西麓にあるメスリ山古墳 250m の二つの古墳は、きれいな前期の巨大前方後円墳でありながら、『記紀』では天皇陵になれなかった。これは、『記紀』で、『鳥見山』が、逆族・登美毘古の本拠と位置付けられたからであろう。

さて、私が奈良盆地から移り住んだ「たつの市」では、《藁の束》を田んぼで穂先を中心にして丸く並べ、背丈ほどに積み上げて乾燥させる。これを「藁-ぐろ」という。私はこの《藁-ぐろ》から類推し、(蛇)の《と-ぐろ》の「と」が(蛇)の意味ではないかと連想した。

一音節語の「と」が(蛇)を意味するなど、これまで耳にしたことが無い。しかし、そのように考えれば、『鳥見山』の「と-み」も(蛇)の意味の重語であり、「と-み山」の名は、《蛇のとぐろ山》である《神奈備山》に如何にも相応しいものとなる。

全国的には知られていないかもしれないが、鎌倉初期の大分県の武将・緒方三郎惟栄は、源氏方に付いて、平家方に付いた宇佐神宮を焼き打ちし、最後は義経に味方して、頼朝を手こずらせた英傑である。この惟栄は大分県南部で蛇伝説に包まれており、尻に《蛇の尾の形》と《鱗》が有ったから「尾形」と言ったという。

大分大学教授の富来隆さんが、惟栄を祀る神社 30 数社を調べ、その全てが、「飛ノ尾社」、「鷄の尾社」、「富の尾社」と記され、全て「トビノオ社」と呼ばれているから、「トビ」とは、《蛇神》を言うのではないかと推測しておられた(『卑弥呼』1970 年、72 頁)。

私の解釈に拠れば、「と-び」は、「と-み」の「み、mi」の、(蛇の意味)の《巳い様》の「み」の m 音が、b 音の「び、bi」に交代したもので、「と-び」と「と-み」は同意である。その「と」もまた(蛇)の意の一音節語と思い至り、富来さんを思い出した。富来さんも民俗学的手法を駆使された先駆者である。

奈良盆地の「鳥見山」の北に隣接する神奈備山『外鎌山』(と-がま山)292m も、「と」は(蛇)で、「かま」は《蛇のかま首》と解釈できる。そう言えば、この『外鎌山』の頂上部は、正に(蛇)が(かま首)と持ち上げようとしているかのように少し尖って見える。昨年、島根県安来市の日本海岸を走っていたら、きれいな三角形の《とぐろ山》を見つけた。ナビで調べたら、『十神山』(と-かみ山)92m と分かり、

「と」は、やはり(蛇)と確信した。ネットで調べると、「み-かみ山」(巳-神山)は、琵琶湖東岸の一例(三上山)しかなかったが、「と-かみ山」(と-神山)は数カ所あった。

鹿児島県国分市にある『止上神社』(と-かみ神社)に行ってみたら、やはり、背後の《円錐形の山》、『尾牟礼山』(おむれ山)を《ご神体》としていた。香川県三豊市の『爺神山』(と-かみ山)214m、大分県日田市の『渡神岳』(と-かみ岳)1,150m、福岡県筑前町の『砥神岳』(と-かみ岳)496m は、写真で確認したが、やはり《三角形の山》である。

こうなると、『赤神山』の「あか-がみ」から『(あ-が)阿賀神社』になったように、(蛇神)である「と-かみ」の「と」が母音変化して「た」になり、「た-かみ」の『(た-が)多賀大社』になったのではないかと思えて来た。

(六) ここで、『上代語の音韻法則』とされる《甲類・乙類の別》の問題に触れておきたい。

「神(か-み)」の「み」は乙類で、「上(か-み)」の「み」は甲類である。また、「巳・靈」の「み」は乙類で、「三・御・弥・見」の「み」は甲類であると言われている。

ここから、「三上山」は「巳神山」ではないといった反論も出て来よう。しかし、上に挙げた神社と山の名の「み」、「かみ」の漢字が、奈良時代の後半になって、《上代特殊仮名遣いの甲・乙類の別》が失われた後に当てられたのであれば、この《音韻問題》を持ち出しても意味は無い。

また「巳・靈」との関連を断ち切るため、あえて異なる漢字を当てたのかもしれない。そのように解釈する以前の問題として、《甲・乙類の区別》がなされたのは間違いないが、果たしてそれが《音韻に拠る区別》であるかどうかはまだ断定されていない。

《甲・乙類》とされるそれぞれ音韻自体がまだ明らかにされていない以上、そう言うことも出来る。

そして音韻問題を持ち出そうと何を持ち出そうと、《三角形の(蛇)のとぐる山》と、《神体山》・《神奈備山》との間に、ここに私の指摘した厳然たる関係の存在することを否定することは出来なからう。

[6]

さて、このような《神奈備山》の麓で、銅鐸が大量発見された処があり、注目される。

出雲の神名火山『仏経山』366mを望む『加茂岩倉遺跡』では、日本最多の銅鐸 39 個が出土し、同じく『仏経山』を望む『神庭荒神谷遺跡』から、銅鐸 6 個と銅剣 358 本が出土した。

琵琶湖東岸の『三上山』の麓の野洲町『小篠原大岩山遺跡』からは日本で二番目の数の銅鐸 24 個が出土した。

徳島の『眉山』周辺からも、合わせて銅鐸 19 個が出土している。奈良盆地の『三輪山』周辺からも合わせて銅鐸 8 個が出土している(桜井市 5 個、田原本町唐古 1 個、天理市 2 個)。

《三角形の(蛇)のとぐろ山》もまだまだあるだろうから、これと銅鐸の発見地を対照して調べれば面白いが、そこまで手が回らない。
また、銅鐸出土地、あるいはその近くに、《「かみ」(神)の字を持つ地名》が多く、また、(神)と同意と考えられる「かも」・「みわ」の名の地名が多いという。

神戸市の六甲連山の一支脈にある『桜ヶ丘遺跡』から銅鐸 14 個が発見された。14 個は、一カ所での発見数では日本三番目である。

その出土地は以前から『かみか』と呼ばれ、「神岡」と書かれている。
「かみか」は、「かみ-おか(kami-oka)」の二重母音(i-o)の二つ目の母音(o)が脱落して、「かみ-か(kami-ka)」になったと考えられる。
二重母音が嫌われたのは奈良時代までであるから、この地名は奈良時代以前にまで遡る可能性がある。

さて、《銅鐸》が作られ、埋納されたのは、弥生時代である。
その《銅鐸》が《神奈備山》を望み見る処に埋納され、「神」、また「みわ」・「かも」と呼ばれるに地に埋納されている、ということは、《銅鐸》が《神》と強い関わりを持っているということである。
そして、《円錐型の山》が《蛇のとぐろ山》、《巳-輪山》、《み-わ山》、《神-並み-の山》、《神奈備山》と崇められたのも、弥生時代であったということになるだろう。

それが奈良時代になると、この《神奈備山》と《蛇のとぐろ山》との関連も、《銅鐸》そのものも忘れ去られたのである。

以上、《日本人の習俗》と、《m 音と b 音の交代現象》から、《神さまの正体》を考えてみた。(2016.7.1)

《日本語における m 音と b 音の交代》については、
福岡県の地名『八女と矢部』にかけて発表した。

2008 年 久留米地名研究会

2010 年 『多元』会報(96,97 号)

2012 年 『九州古代史の会』会報(九州倭国通信 166 号)

2012 年 6 月 久留米大学『公開講座』

またその後、『日本語の漢字に残る漢音と呉音』として構成し直し、

2012 年 10 月 『筑紫古代文化研究会』40 周年講演会にて発表した。

『倭語「神奈備」の意味を探る』は上記の応用編であり、次で発表した。

2013 年 『多元』会報(115、116 号)

2013 年 『九州古代史の会』会報(九州倭国通信 166 号)

「御稻御倉」と《日本の原初の神》

永井正範

前稿の「日本の神様の正体」(「倭語『神奈備』の意味を探る」)では、《日本の原初の神の正体》を考えた。

この小論は、その「神」と「倉(くら)」との関わりから、《神の正体》を再考する。

〔一〕「高倉下」(たかくらじ)

「神社」とは神を祀る社(やしろ)である。

『延喜式神明帳』に「~坐神社」という神社名が多く見られ、「~」は地名で、「~に坐(い)ます神の社」の意であり、当時の神社の「呼び名」であったと思われる。

「社」(やしろ)は「屋代」で、人の住む家である「屋(や)」の「代(しろ)」、「代わり」である。

この「神の社」が高床式の「倉」であることは日本人なら誰でも知っている。伊勢神宮の「社」は「板倉造り」だが、日本全国、どこの神社も板を張った高床式の「倉」である。

当然ながら、板が簡単に作れなかった弥生時代には、丸太を重ね、縄で柱に縛り付けて壁にしたらう。

「~神社」(じんじゃ)と言わず、「~神宮」(じんぐう)と呼ばれる神社がある。私は日本の原初の《神》は「蛇」で、「宮」(み-や)の語は、「巳(み)い様の屋」の「巳-屋」(み-や)から生まれ、(神聖なる神の屋)となり、(最も神聖な人)である(天皇)の(住まい)に用いられるようになったと考えている。

「神宮」(じんぐう)の語は、「神社」と同じ構成の語として、かっこ良く音読みされるようになった平安時代に生まれ、(天皇家)にゆかりの深い「伊勢神宮」、「宇佐神宮」、「熱田神宮」など、特定の「神社」に限って用いられ、一般の「神社」の上に位置づけられている。

さて、『書紀』に、神武天皇が東征の途次、土地の神の悪気で眠らされる説話がある。

このとき、天神(あまつ神)の「武甕雷神」が熊野の「高倉下」(たかくらじ)に、「汝の庫(くら)に剣を置くから神武に奉れ」と告げ、「高倉下」がこの剣で神武を救う。

小学館版『日本書紀』はこの「高倉下」の語の意味を解しかねたようで、次のようなユーモラスな解説をしている。

【クラジは文字通り「倉庫の下」の意で、校倉造りに見るような高床式の建造物は、床下に高く広い空間があり、そこに牛が立っていたという話もある】(第1巻 221頁)

私は「高倉下」を次のように考えている。武甕雷神は「高倉下」に汝の「庫(くら)」と言うのだから「高倉下」(たかくら-じ)は「倉の主」である。

そして、「し、じ」を語根に持つ言葉には、「し(氏、師)」、「(人の丁寧語)。

大分県宇佐では、

(あの人)を「あん-し」と言う。

「うじ(氏)」

「なんじ(汝)」、な(汝)のし。

「ぬし(主)」
「あるじ(主)」

があり、
「たかくら-じ」の「じ」は、
倭語の「し」と共通し、
(人、尊敬すべき人、あるじ、主)を意味していると考え。
さらに、『日本書紀』神代紀に次の例がある。

「ぬし(主)」
(天之御中主尊)、(稲田宮主神)、(大国主神)、(大物主神)、(事代主神)
「ち」

(句句廼馳) くく-の-ち
(野槌)の-つ-ち
(國狹槌尊) くにのさ-つ-ち
(雷)いか-つ-ち
(軻遇突智) かぐ-つ-ち
(武甕槌神) たけみか-つ-ち
ここでの「の」と「つ」は、連体格助詞である。

「ぢ」
(可美葦牙彦舅尊) うましあしかびひこ-ぢ
(大戸之道尊) おおとの-ぢ
(大富道尊) おとま-ぢ
「むち(貴)」(大日靈貴) おおひるめ-無知
(道主貴) ちぬしの-むち
(大己貴) おおな-むち
以上を見れば、

倭語の「し、じ、ぬし、ち、ぢ、むち」はズバリ、漢字の「主」の意味で用いられており、「~の主」は、「~の神」をも意味したと考えられる。
また、「じ」と、「ぢ」は、発音上区別することは困難であり、であれば、意味も同一であったと思われる。

『書紀』は「高倉-下」の「下」の漢字に「註」を付して「じ」と読ませる(岩波版『日本書紀』上巻 206 頁)。
これは、この説話が「たかくら-じ」の音声で伝わっており、『書紀』の編者が、(熊野の身分の低い人)と考えて、「下」の漢字を当てたためと考えられる。

しかし、漢字の「下」の字には、「じ」の音も訓もないから、「じ」と読ませるのは無理がある。
そして、この物語の主題は、「たかくらじ」が、「天神」に協力して「神武」を助け、東征を成功に導く処にあり、身分の低い人として扱う理由はない。

『書紀』は「たかくらじ」を、(その土地の神)、すなわち(地祇)としてこそ扱うべきだったのである。
このように、「たかくら-じ」の「じ」は「神」に対する(尊称)と見るべきであり、また「高倉-じ」は(倉の主)なのだから、右の古代の用例からするなら、(最もふさわしい漢字)は「主」であり、「高倉-主」とこそ、書くべきだったのである。

そうすると、『書紀』仲哀紀に出て来る「岡の水門の神」の「大倉主」が連想される。

「大倉主」は通常「おおくら-ぬし」と読まれているが、こちらも古代には「大倉-じ」と称されていたのに対し、(尊称)の「じ」に、「主」の漢字が当てられたのではないかと考えられる。

この「岡の水門」から遠賀川を遡った処にある「剣神社」に祀る神を「倉師(くらじ)大明神」という。

この「くら-じ」の意味も「倉の主」であり、「~大明神」は中世の(尊称)であるから、古代においては、「高」あるいは、「大」の(美称)を付して、「高-庫-主」、あるいは、「大-倉-主」と表記されていたとも考えられる。このように分析してみれば、「じ」に「下」の漢字を当てたのは、『書紀』の編者の明らかな〔失策〕である。

小学館版『日本書紀』のユーモア溢れた解説者も、『書紀』のこの〔失策〕を見抜けなかったと言えよう。

以上、古代から「神の社」は「倉」であり、「神」は「倉の主(くら-ぬし、くら-じ)」とも言われたのである。

〔二〕「くら」の〔意味〕

では、倭語「くら」の〔意味〕を確認しておこう。大きく分けて、三つある。

i. 〔原初の意味〕「倉・蔵・庫」の漢字が当てられ、この漢字の訓が倭語でいう「くら」となる)

ii. 〔i から派生〕「坐、座」(大事なものを置く処)、(貴人、神の座る処)

iii. 〔ii から派生〕「鞍」(馬の背に設けられた貴人の座る処)

続いて「くら」の派生語を見よう。

「ま(真)+くら」(人の最も大事な処)、「頭」

「まくら」「枕」、(頭を置く処)

「まくらへ」「頭辺」(頭の辺り)

「いわくら」「磐座・磐倉・岩倉」(神の依り代である自然石の岩)

「みてぐら」「幣、幣帛」(御手座)、(手に持って神に奉納するものの総称)

「みたえくら」「御栲座」(栲で作るみてぐら)(みたえくら)

「さくら」「さ(早)+くら」(初々しい神の依り代、穀霊、桜)

「たかみくら」「高御座」(天皇の位)、(天皇が即位式で座る褥、椅子)

「くらい」「位」「くら(座)+ゐ(居)」(座席の序列、身分、階級)

「くらかみ」「座長」(上席、上席の人)

「くらしり」「下風」(下座、下座の人)

「くらい」「暗い」「くら」+「い」(形容詞を作る接尾語)、(倉の中は暗い)

「まっくら」(真暗)、

「くらがり」(暗がり)、

「くらやみ」(暗闇)

「くらおかみ」「闇竈」(暗い谷の神)

「くらやまつみ」「闇山祇」(山の神)

「くらみつは」「闇岡象」(山の水の神)

「くろ」「黒」(倉の中を色で言えば「くろ」)

「くらす」「暗らす」(心を暗くする)

「くらす」「暮らす」、(暗くなるまで時間を過ごす)、(一日を過ごす)、(月日を送る)
「くれる」「暮れる」(日が暮れる)(途方に暮れる、~にくれる)
「くれ」「呉」(日が暮れる処にある国)

確認してみれば、倭語の「くら」の派生語は全て(倉)の意味から派生していると分かった。
同時に、「くら」の語は(大事な)、(高貴な)、(神聖な)のニュアンスを併せ持つことが伺われる。

〔三〕「くら」の「語源」
では、倭語「くら」の「語源」を考えよう。
私は以前から倭語の「ほら」に注目している。
何となれば、人工の「くら」(倉)は入り口の他は、床も、天井も、四周の壁も全て塞がっていて、自然の(山の洞穴)や、(木の洞)を言う「ほら」の形状と同じだからである。

岩波版日本古典文学大系『日本書紀』によれば、古朝鮮語 hol、古満州語 holo に(山の谷)の意味があったという(上巻 609 頁)。
とすれば、(山)と(暗い)の二つの共通キーにより、(山の谷)から(山の洞穴)の意味が派生したことは十分に考え得る。
それは大陸側であったかもしれないし、倭語の「ほら」として受け入れた日本側であったかもしれない。

そして日本語の h 音は、〔はね、ひと、ふね、へそ、ほね〕のように、口先で発する弱々しい音であるが、ヨーロッパの h 音は、〔hat、hit、heavy、host〕のように強い喉音である。

中国大陸の h 音も同様で、日本人には中国語の h 音は、日本語の弱々しい h 音より、喉音の k 音に近いと聞こえたようであり、h 音の漢字は全て日本語では k 音となって定着している。
海 hai→カイ、漢 han→カン、韓 han→カン、汗 han→カン、
好 hao→コウ、行 hang→コウ、花 hua→カ、火 huo→カ 等
とすれば、
大陸の hol、holo が h 音の「ほら」として倭語の(自然の洞窟、木の洞)の意で定着した一方で、k 音の「くら」としても、倭語の(人工の倉)の意で定着したと考えることができる。

以上の〔言葉の意味〕と〔日本人の発音の特性〕の分析からして、倭語の「くら(倉)」と「ほら(洞)」は、古朝鮮語 hol、古満州語 holo に由来する〔古い外来語〕であり、〔同根の語〕であると考えられるのである。

〔四〕「くら(倉)」と「ほら(洞)」
さらに『日本書紀』に、倭語の「くら(倉)」と「ほら(洞)」が〔同根の語〕であることを示す説話がある。
【「岡の水門」の男神の「大倉主」(おほくらぬし)と女神の「菟夫羅媛」(つぶらひめ)が、「岡の水門」で仲哀天皇に意地悪して船を動かなくさせる】
(上記岩波版『日本書紀』上 324 頁)
しかし「岡の水門」は水深があって良港とされているから、この神話はなじまない。

この「岡の水門」の東に、「洞(ほら)の海」、現在の「洞海湾」がある。「洞の海」は、外海の「響灘」と(狭い水道)の「と(戸)」で繋がる袋状の海であり、正に、(洞穴)のような形状をした大きな内海である。そしてこの「洞の海」は、細い「江川」という川で「岡の水門」に繋がっている。明治時代まで、小舟なら外海の「響灘」から「岡の水門」まで通り抜けることが出来たという。

『日本書紀』の説話では、神功皇后はこの「洞の海」の航路を取り、外海から「岡の水門」を目指す仲哀天皇と、「岡の水門」で落ち合う予定であった。しかし、この「洞の海」は遠浅の海で、神功皇后の船も恐らく大きな船であったのだろう、干潮で船底が海底について動かなくなったという。

以上の説話から判断すれば、『書紀』で《岡の水門の神》とされている男神の「大倉主」と女神の「菟夫羅媛」は、実は、《洞の海の神》だったのであり、「洞の海」における干潮時に船が海底について動かなくなる現象を、太古から、「洞の海の神の意地悪」と言い伝えてきたものと思われる。

ところが『書紀』の時代には「岡の水門」の首長が、「洞の海」を勢力下に置いて、この男女の二神も《岡の水門の神》として取り込み「岡湊神社」と、8km 西の岡の上にある「高倉神社」に祀っていた。そこで『書紀』の編者はこの元《洞の海の神》の意地悪の話を「岡の水門」における話として記したのであろう。

しかし、そもそも男神の「大倉主」の《倉の主》と言う《名前》自体、「岡の水門」の主としてはなじまず、《洞の海の主》にこそふさわしい。さらに相棒の女神の「つぶら媛」の名前の(つぶら)も《洞の海の形状》をいうと考えることが出来る。この内海が海と繋がる戸(と)の端(はた)の地が「戸畑(とばた)」である。

「洞の海」は、この入口の「とばた(戸畑)」の他は、全て《つぶっている=つむっている》内海だからである。一方に《入口》があって、片方が《つぶっている=つむっている》巻貝を、「かた-つぶり=かた-つむり」と言う。この「つぶる、tu-bu-ru」と、「つむる、tu-mu-ru」の語も、私の言う「b音とm音が交代した同じ意味の倭語」である。このように分析してみれば、「大倉主」と「菟夫羅媛」が「洞の海」の神であることは疑問の余地が無い。

もっともこれは私の解釈であり、岩波版『日本書紀』はこうした解釈は採らない。また、《「菟夫羅媛」の言葉の由来》は解明できなかったと見え、《語義》に触れない。

小学館版『書紀』も同様で、「大倉主・菟夫羅媛」の二神を「岡の水門」の神であるとし、「地域を主催する塞神(さへの神)である」とするが、これでは説明になっていない。

「大倉主・菟夫羅媛」の名義については《不詳》として触れない(1巻407頁)。以上、『日本書紀』のこの神話を見ても、《洞(ほら)の海の主である神》は、《倉(くら)の主》の名を持っており、「くら(倉)」と、「ほら(洞)」が〔同根の語〕であることを裏付けている。

なお、「倉」は「大きい倉」、「高い倉」が、(立派な倉)とされ、「大」と「高」が「倉」の美称となり、この美称と「主」の尊称を付した「大倉主」、「高倉主」が《神》の名とされたのである。
遠賀川河口にある「岡湊神社」は「大倉主社」とも言い、8km 西の岡の上にある「高倉神社」の外宮、すなわち、「高倉下宮」とも言う。

〔五〕「倉主」(くら-ぬし、くら-じ)
では、日本の《神》は、何故、「社(やしろ)」である「倉(くら)」に祀られ、「倉主」(くら-ぬし、くら-じ)が神の名になるのであろうか？
吉野裕子さんが結論し、私の前稿の『神奈備』で結論したように、日本の《神》が「蛇」ならば、「蛇」、すなわち《神》は、何故、高床式の「倉(くら)」に祀られるのであろうか？
吉野さんは、ここの処を全く問題にされていない。
私もそこまでは考えなかったが、今般、伊勢神宮を調べるうちに、「御稻御倉」の存在を知って目を開かれた。

「御稻御倉」は、伊勢神宮内宮の境内社である。伊勢神宮には、末尾に「神社」と付けず、「の御倉」で終わる神社が伝わっており、他に、「調御倉」(つき-の御倉)、「御塩御倉」(みしほ-の御倉)・「舗設御倉」(しつらひ-の御倉)・「由貴御倉」(ゆき-の御倉)がある。「倉(くら)」そのものが(神の社)であり、美称の「御(み)」を付けた「御倉(みくら)」であれば、「神社」の語を重ねるまでもないからであろう。

「御稻御倉」の「御稻」は(みしね)と読む。
三省堂『詳説古語辞典』は「しね」を「稲の古語」と説明するが、《単独の「稲」の語》を「しね」と呼ぶ例を聞かないから、これは誤りである。
私の解釈では、「稲(いね)」に美称の「御(み)」を付ければ、(み-いね、mi-i-ne)と二重母音になる。
上代は、この二重母音を徹底避けた。

そして、「み-いね、mi-i-ne」の場合、二つ目の母音に子音の「s」を被せて、(mi-si-ne、みしね)と発音し、二重母音となるのを避けたのである。
これは〔上代の発音のルール〕であって、「稲」を言う「しね」の古語があった訳ではないことを示している。

二重母音になるとき、二つ目の母音に子音の「s」を被せて二重母音を避ける〔上代の発音のルール〕としては、霧雨(きりあめ→きりさめ)、小雨(こあめ→こさめ)、春雨(はるあめ→はるさめ)、氷雨(ひあめ→ひさめ)、村雨(むらあめ→むらさめ)がある。
私は「雨」以外の例がないか？と探し回っていた処だったから、大発見であり、嬉しくなった。

伊勢神宮で伝えてきた「御稻(みしね)」の語と発音は、こうした二重母音を避けるという〔上代の発音ルール〕を現代に伝えていたのである。
これは「みしね-のみくら(御稻御倉)」の言葉の淵源の古いことを示している。
この「稲」の語を辿るうち、祝詞(のりと)に「荒稻(あらしね)」、「和稻(にぎしね)」とあるのも知った。
これもまた、全く同じ〔上代の発音ルール〕に拠っている。

「御稲御倉」は、伊勢神宮の境内社 30 社のうち、序列 6 位の「神社」で、神宮の神田で「抜穂(ぬひぼ)」として刈り取った「稲穂」を保管しておき、この「稲穂」を取り出して、一年を通して、天照大神に捧げる神酒・御餅・御飯(おんいひ)を作るという。

ということは、「御稲」が、高床式の「御倉」である「御稲御倉」に置かれる、すなわち、(祀られる)主役だったということである。ならば、「御稲」こそが《神》そのものであったと言って良いのではなかろうか。

つまり、「御稲御倉」は、古代の〔稲を廻る人の営み〕を伝えていたのである。採集生活から水稻を栽培する弥生時代に移ると、秋に収穫された「稲穂」は翌年の秋までの《命を繋ぐ糧》となり、この「稲穂」こそが《最も価値ある物》、《最大の宝》となり、権力者の《権力の源泉》となった。

この〔稲を廻る人の営み〕は、弥生時代における全国の村に共通しただろう。弥生時代の《稲の穂刈り》を伝える「抜穂(ぬひぼ)の祭り」は、伊勢神宮の神田に伝えられ、同じ様に、この祭りを伝える神社は全国に多い。弥生時代には、《稲の穂刈り》こそが、最も重要で、神聖で、喜ばしい行事であったことが伺われる。

こうして秋に収穫され、権力者の許に集められた「稲穂」は、翌年の収穫まで高床式の「くら(倉)」に収められ、《神》そのものとして厳重に保管されただろう。

ところがこの《稲穂の神》には、「ネズミ」という困った敵がいて、保管する間中、襲われたと思われる。その「ネズミ」の天敵が「蛇」である。弥生時代の「くら」は、構造上、隙間が多く、「ネズミ」と「蛇」は結構自由に出入りできたであろうし、「くら」に住み込むこともあったろう。床下の柱に設けられたネズミ返しは「蛇」には苦にならないし、「蛇」の住み込んだ「くら」には、「ネズミ」は近寄り難かったろう。

縄文時代、山で生きるための糧を探す時、最大の畏怖の対象であった「蛇」は、稲作経済の弥生時代になると男根に重ねられて〔豊穰を齎す種神〕とされ、それだけでなく、人が生きるための敵である「ネズミ」の敵として人の最大の味方となり、《神である御稲(みしね)》を《守護する神》となったのである。

私は吉野裕子さんに影響されて、《日本の原初の神》を「蛇」と考えた。しかし、「蛇」は《守護神》であり、その《守護神》に護られる《本来の神》があった、それが「倉」に保管される《御稲の神》であったのだ。

この《守護神》の《蛇》と、《本来の神》である《御稲の神》が、「御稲御倉」、すなわち「倉」で繋がったのである。

〔六〕忘れ去られた《原初の神》

ところが、生産力が高まり、社会が発展して来ると、社会には様々な《宝》が溢れ、余りに日常的なものとなった《コメ》はいつの間にか《神》の座から降ろされて、《神》に供される供物、すなわち《神饌》(しんせん)としての地位に置かれることになった。

また人知が進んで、《様々な人格を持った神々の体系》が作り上げられ、『記紀』には、《五穀の起源神》として、
「おお-げ-つ-媛の神」(『古事記』にのみ記される神)
「大気都比売」他の表記がある(岩波版『古事記』57,59,85,111 頁)、
「うけ-もち-の神」
(『日本書紀』にのみ記される神)
「保食神」(巻1 第5段第11の一書、岩波版『書紀』上巻101 頁)
が記される。

そしてこの《五穀を司る神》として、
「うかの-みたま-の神」「宇迦能御魂神」(岩波版『記』89 頁)
「倉稻魂命」(『紀』巻1 第5段第6の一書、岩波版『紀』上巻90 頁)
「とよ-うけ-びめ-の神」「豊宇気毘賣神」(『記』61 頁)、
「登由宇気神」(『記』129 頁)
「豊受大神」、
「止由気大神」(伊勢神宮外宮『止由気宮儀式帳』)
が記されている。

以上の神名に見られる「うか」、「うけ」、「け」、「げ」は(穀物、食物)を言う同じ意味の言葉と考えられ、ここに挙げた神々は、平安時代から鎌倉時代にかけて、「稻荷神(いなり神)」、(稻成り神)として同一視されて行く。

すなわち、『記紀』の段階においては、既に、《日本の神》は《様々な人格を持つ神》に移行しており、弥生の時代の《原初の神》は忘れ去られているのである。

伊勢神宮は、「御稻御倉」を現代に伝え、神宮を本宗とする「神社本庁」は、「御稻御倉」に祀る神を、《御稻御倉の守護神》とする。ここにも「御稻」自体を《神》とする認識は無い。
と同時に、《御稻御倉の守護神》を、「蛇」の如き(忌むべきもの)とする認識も無い。
だから、「神社本庁」の言う《御稻御倉の守護神》とは、《その役割を担うという人格を持つ神》がいると認識されているという事なのであろう。

「御稻御倉」の《伝統》を伝える伊勢神宮においても、はるか遠い弥生時代には「稲穂」を《神》と崇めたことも、この「稲穂」を天敵の「ネズミ」から守ってくれる「蛇」を《守護神》と仰いだことも、「御稻御倉」自体がこうした《日本の原初の神を伝える名残り》であることも、みんな忘れ去られたのである。

《神》を祀る日本全国の神社においてもまた、『記紀』の記す《人格神》を祭神と仰ぐばかりで、《本来の原初の日本の神》は忘れ去られたのである。

〔七〕
しかし、日本全国の農村で、自然と共に生き、生業として《稲》を作って暮らして来た人々は、「天照大御神」を想う訳ではなく、「うかのみたまの神」や、「とようけびめの神」を想う訳でもなく、ただ、《習慣》と《伝統》に従って、正月には、秋に収穫した「稲」で、「御-鏡」(お-かがみ)を作り続けて来た。

これを家の中で最も神聖な場所である床の間に《神》として祀り、秋の収穫でこの「お-かがみ」を作ることの出来たことを《神》に感謝し、来るべき新たな年もまた実り豊かであることを祈り、この「お-かがみ」を家族一同で分けて食し、《神》にあやかって来た。

ここでは、『記紀』が記す《人工の神々》も、村の神社が祀る《『記紀』の人格神》も意識されることは無い。

ただ自然とその恵みを《神》に感謝する《心》があるだけである。
その《心》が、弥生時代以来、日本人が受け継いで来た真の《神》を今に伝えていたのである。

《真の人の歴史》を伝えて来たのは、『記紀』の歴史書ではなく、神社でもなく、自然と共に生きて来た《日本人の心》そのものだったのである。
何とも素晴らしい日本の《習俗》であり、《伝統》ではないか.....。
私は、吉野裕子さんの考察を学んで、「蛇」を日本の《神の正体》と考える処まで辿り着いた。

それを記したのが前稿の「倭語『神奈備』の意味を探る」であった。
そして今般、伝統を守る伊勢神宮が伝えて来た「御稻御倉」を知って、「蛇」は《守護神》であり、「その《守護神》に護られる《本来の神》があった.....」という認識に到達することが出来た。

日本の原初における《本来の神》、それは「倉」に保管される主役、すなわち、「倉」に祀られる「稲穂」であった。
私は、吉野裕子さんに導かれ、吉野裕子さんに学んだ手法を採ることによって、吉野裕子さんを超えることが出来た。
これで私は、直接お会いすることの出来なかつた吉野裕子さんにご恩返し出来たのではないかと思います。

さて、前稿の『神奈備』で、私は《神さまの正体》を「蛇」と知ることの出来る《神さまを象徴する物》として、三つを挙げた。

そして、伊勢神宮が伝える「御稻御倉」によって《日本の本来の神さま》は「稲穂」であり、「蛇」はその《守護神》であることを知った今、前稿には若干の修正を加えねばならなくなった。

一つ目の「注連縄」が、「蛇」の交尾を表すについてはその通りで、それを「稲わら」で作るところが《本来の神である稲》と、《その守護神である蛇》の密接な関係を表していると言うことが出来よう。

二つ目の「御-鏡」(おかがみ)もまた、同様である。
その素材自体が《本来の神である稲》によって作られ、その形は《守護神》である「蛇のとぐろ」を模したのである。
そして「お-かがみ」の「かが」は「かか」、すなわち古い外来語の「蛇」であり、「み」は「蛇」を意味する最も古い倭語である。

そして庶民が稲で作った餅の「かがみ」こそ、日本の原初の《神》であり、「かみ」の語の語源となったのである。

三つ目の「蛇のとぐろ山」を「神奈備山」と崇めるについては、弥生時代の人達に拠って、この山の界限が、《守護神》に守られる良き処と認識されたという事であろう。
(2016.7.1)